

軍事化進む宮古島へ

2025南大阪沖縄現地学習会

4月18日～20日、南大阪平和人権連帯会議の取り組みに支部からは、3名で参加しました。

例年、沖縄本島の戦跡を中心に視察、学習を行っていますが、今年は沖縄本島より遠い宮古島まで行ってきました。目的は近年、急速に進む琉球弧の軍事化を学習するためです。

現地では、宮古島住民連絡会の共同代表である清水早子さんから説明を聞き、自衛隊基地前で「宮古島にミサイル基地はいらない！宮古島を戦場にさせない！戦争につながる電子線部隊の配備反対！」さらに、「宮古島トライアスロンボランティア活動での迷彩服着用

に反対する」シュプレヒコールをしました。

その後も、日本軍『慰安婦』祈念碑や、準天頂衛星『みちびき』の管制塔などの説明してもらいました。その中でも私の印象に残っているのは、保良地区の驚くほどの弾薬庫の数々、民家まで250mの近くでの射撃場など住民の声も

聞かずに今もなお、基地建設拡大が続いている事には驚きを隠せませんでした。

1945年9月に米軍兵が宮古島に上陸し、日本軍の武装解除を行った事から、住民連絡会が自衛隊の電子戦部隊が車両輸送するのを阻止行動する思いが伝わりました。

3日間、宮古島の美しいエメラルドグリーンの海に囲まれた景色と名所めぐり、軍事化される宮古島の現状を学びました。

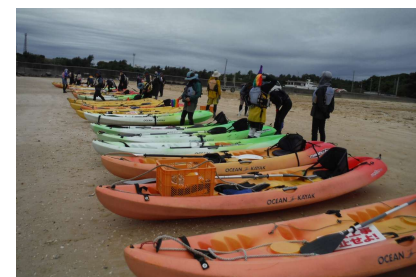
(執行委員 和泉 清)



4・25海上行動

辺野古新基地建設本体工事は、2017年4月25日から始まった。それに対して抗議するため、4月25日から3日間、8年目となる海上行動に、田村執行委員と参加した。

カヌー32艇、船6隻が大浦湾側での杭打ち作業現場近辺に集まり、抗議の声を上げた。朝から心配した天気ももち、風もなく海面



は信じられないほど静まっていた。

私たちは辺野古で約20年カヌーを漕いでいるが、まるで私たちに「工事を止めてくれ」と言わんばかりの静けさで、このような状況は初めてだ。



大浦湾では地盤改良船(サンドコンパクション船)が6隻も配備され、その光景はとてつもなく大きい。実際に近くで見ると迫力は

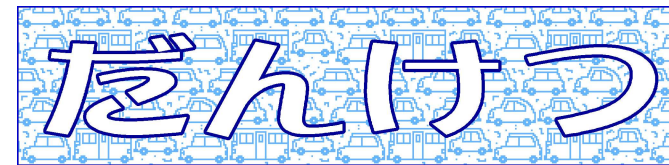


違う。

大浦湾に約7万1千本もの砂杭を打つ工程だが、90メートルもある軟弱地盤に杭は打ちこめない。無謀な工事で生物多様性の海を壊すことは許されない。

この8年間政府は「辺野古が唯一」との繰り返しで「代執行」という、とてつもない強権を振りかざして工事を強行している。同行した金井船長は「来年はもうこの集会をしないで済むように、工事を止めたい」とあいさつされた。

(副委員長 陣内 恒治)



第392号 2025年5月12日



発行
大阪市港区築港1-12-27
全日本港湾労働組合関西地方大阪支部
発行責任者 陣内 恒治

第96回中之島メーデー開催



5月1日、中之島公園剣先広場にて第96回中之島メーデーが開催されました。

近年稀にみる晴天の中で、「労働者の国際連帯で、平和と豊かな生活を勝ち取ろう！」をスローガンに支部155名を含め400名が参加されました。

集会は、今年の主催団体である南守全労協議長の挨拶で始まり、物価高や平和の担保が出来ない今の時代を変えるべく「戦争ではなく共生社会」「大幅賃上げ」「労働組合弾圧

反対」「最賃を1500円に」「IR・カジノ反対」「大軍拡反対」「沖縄・琉球弧の軍備反対」「労働法制改悪反対」「あらゆる差別反対」のサブスローガンが提起されました。その後、各団体あいさつ、政党・議員あいさつを経て闘争・争議報告があり、支部からは大和運輸分会、梅南鋼材分会、また、大和鋼業（ユニオンおおさか）の闘争報告がありました。

集会終了後は、西梅田公園までデモ行進を行い、沿道の市民



にアピールをしました。

課題として、各単組の実務担当が、時を経て替わって行く中で、「中之島メーデーの趣旨」やシュプレヒコールのやり方など、課題も浮き彫りになったメーデーでした。

(委員長 小林 勝彦)

